

下商物語 (その下)

卒業生寄付金による講堂

寄稿 富田 義弘氏

私は少年時代に、「下商商業の重厚な講堂で」という催し物の記事を何度も読んで、字引きで「重厚」の意味を調べたことがありません。そして、「そんな立派な講堂をぜひ見てみたい」と思つて更に強く下商に憧れたものでした。

今から七十五年前、下商創立五十周年記念事業で竣工したのがその講堂です。ところが今年には創立百二十六周年、暗算を得意とする下商生諸君なら、「あれ？一年のずれがあるぞ」と気付くことではないでしょうか。

そうです。この講堂は開校半世紀に当たる昭和九年五月十九日に起工し、当時の文部省による「実業教育五十周年記念式典」開催予定の秋完工を目指したものの、今年ほどの猛暑は例外としても未曾有の日照りつづきのために水不足となつて工事が大幅に遅れ、翌十

年三月末日によりやく竣工式を行ったからです。しかし、本当はその十年前の大正十五年(一九二六)に名池山から千疊ヶ原に移った新校舎と一緒に建つべきで、予算を計上されていたのに、起債額が県当局によって削られ後回しになったのです。山口県下第一と評される堂々たる千疊ヶ原校舎が完工したのに、なぜ講堂が無いのか、という声が広く喧伝され、「まさに点暗を欠く」と書いた新聞もあり、昭和六年に下商同窓会が自発的に募金活動を始めました。当時、中部東海地区で名校長として名を馳せていた岐阜県立東濃中学校(旧制)の校長を懇請して就任して頂いた藤井鶴松校長は、全国および海外(主として朝鮮半島と中国東北部の満洲)在住の同窓生を何度も訪問し募金につとめたそうです。

そこで集まった浄財は、同窓生千五百余人から四万四千二百二十円、父兄が五千円、そして雑収入が千五百五十円、加えて下関市からの三万円で合計八万三千七百七十円、工事費の63パーセント以上を同窓生とPTAで賄った下商の母校愛が当時のマスコミに大きく取りあげられたものです。

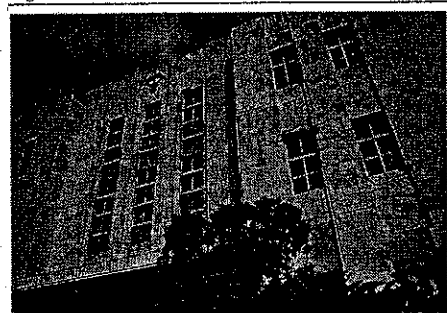
昭和十年から終戦までの間、下商講堂がどのように活用されたのか私は知りませんが、米軍B29空爆によって市中の大半を焼失した下関は、戦争が終わつて平和が戻ると、演劇、講演、音楽会など殆どの催しは焼け残つた下商講堂や極光講堂、そして本村小学校の講堂でした。因みに、私が下商に

在籍した昭和二十五年春から二十八年三月までに下商講堂で催されたものは私のメモによると次の通りです。

○リサイタル
諏訪根自子バイオリン 藤本真理バイオリン 辻久子バイオリン 中島久夫ハーモニカ 井口基成ピアノ 細谷正秋バイオリン クラシックバレエ

○鑑賞
チェーホフの「能」 文楽 狂言 能楽

○講演
武者小路実篤 鳥生菓 下関 税務署長 田鎖弦一 芋島惣次郎 森菊男 高田保馬 小西得郎 本島滝巳 森戸辰



講堂内部の重厚な造りは平成十七年には映画「出口のない海」の撮影に使用されました。外壁の損傷が激しく、改築案が出ています。

男 占領軍エバンス
その他、映画鑑賞は、若草劇場 市民館、大新館、邦楽座、セントラル劇場などでたびたび楽しませて頂き、市内の工場や企業見学等々、授業では得られない幅広い世界を存分に見せて頂き、体験させて貰ったものです。「下商って凄いなあ」と私たちは今でも同窓会で集まる毎にそんな話をし合っているのです。

(昭和二十八年卒)